
刑事達の苦悩

なんじ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

刑事達の苦悩

【Nコード】

N5053B

【作者名】

なんじ

【あらすじ】

ある事件現場で一般市民に刑事だと理解されなかった佐藤刑事そのことを悩む彼女に、親友由美が名案を授ける。

（前書き）

2002年作です。

警察手帳のデザインが変わってまだ日がたっていない頃のお話です。

佐藤は「犬飼」と書かれた玄関のチャイムを押した。

中から出てきたのは、頑固そうな老婆だった。

「なんじゃ、あんたは？」

佐藤は警察手帳を示した。

「私は、本庁一課の刑事、佐藤美和子と言います。少しお話を・・・」

「

佐藤に皆まで言わせず、老婆は吐き捨てるように言った。

「そないな、おもちゃの手帳を出してからに。」

年寄りの田舎もんと思って馬鹿にせられな！

どうせ、あんた、テレビのキャスターなんじやろつ。

まったく近所でおかしな事があると、でえれえうるさいわ」

「あ、あの、犬飼さん。この手帳は本物・・・」

「あんなあ、ほんもんの警察手帳は、黒いメモ帳みたいなもんで、表紙に『け・え・さ・つ・て・ちょ・お』って書いてあるんじゃ！」

「それは、ちがいます。それに、警察手帳は、

新しいデザインになったんですよ」

「わしゃあ、そんな事、聞いたりやせんが。」

言ったいどうすれば、

この老婆に自分を刑事だとわかってもらえるのか？

佐藤は、次に出す言葉を見失った。

そこに高木がやってきた。

「佐藤さん、4階の聞き込み、終わりましたよ」

「高木君、この人に警察手帳を見せてあげてよ！」

必死の表情の佐藤を不思議そうに見ながらも

高木は、老婆の前に自分の手帳を出した。

「ほら、この刑事さんも、同じ手帳をもっているでしょ？」

笑顔の佐藤に、老婆は言い放った。

「ふん、こんな迫力の無い顔の男が刑事なわけないじゃろ」

老婆の迫力にひるみながらも、高木は自分の手帳を示した。

「でも、僕ほんとに刑事なんですよ」

老婆は、高木も、手帳も無視して言った。

「最近のテレビ局の取材は本当に手がこんどるわ」

「だから、犬飼さん、私たちは、本物の刑事なんです。手帳だって本物」

「その証拠はどこにあるんなら」

そう言われて、二人は絶句した。

自分達が刑事である証明は、手帳以外何があるのだろうか？

「おい、佐藤君、高木。二人で何やっとなるんだ」

目暮警部の声に、二人は救われた思いで振り返った。

佐藤は、目暮を、老婆の前に押し出した。

「ほら、犬飼さん。こちらが私たちの上司の目暮警部。」

立派な方でしょう？この方なら刑事さんだって納得して下さいますよね」

老婆は鼻先で笑った。

「何を言いよるんな。」

そないに太つとつたら犯人をおっかけたりできりゃあせまあがな。

太った刑事なんかおるわけ無いじゃろうが」

「ちよつと待って下さいよ。」

太った刑事だつて、ちゃんといいますよ！」

「太ってるつて、犬飼さん。目暮警部は、恰幅がいいだけよ！」

老婆の言葉に深く傷つき、

部下二人の善意のフォローにも、微妙に傷ついてしまう目暮であった。

「目暮警部、下で千葉君が指示を頂きたい物を見つけたそうです」
やってきたのは由美だった。

「由美！どうしてここに？」

佐藤は驚いて言った。

「このマンション付近は、路上駐車が多くてね、重点的に見回っているのよ。」

で、下で千葉君に会って、ちょっと、電話じゃまずいから、って伝言頼まれちゃった」

老婆が笑顔で由美に話し掛けた。

「おや、お巡りさん。お疲れ様」

「犬飼さん、この人が警察官だってどうして信じられるんですか」

佐藤の言葉に老婆は呆れたように言った。

「お巡りさんの格好をしとるじゃろうが」

高木が佐藤の背後で大きなため息をついた。

その日の夕刻

本庁の自動販売機の前で佐藤は由美と話をしていた。

「なんだか、今日はがっかり。」

制服を着ていないと、警察官だって認めてもらえないなんて」

「でも、私服で、見るからに刑事ってわかるのも、問題多いと思うよ」

佐藤は、肩を落として、缶コーヒを両手で包み込んだ。

「でもねえ、刑事とわかってもらえなくて捜査に支障をきたすようじゃあダメよ。」

あゝあ、警察手帳のデザインが新しくなったって、もっと知れ渡るまで

私服の下に、制服着ておこうかしら。

手帳出して、信じてもらえない時は、ぱっと制服になるの」

「いいじゃない。変身ポーズは、警察手帳を高く右手でかざすのね。で、掛け声は『ジャステイス・ポリースパワー・メイク・アールプ
！！』」

決め台詞はどうしよう？

『法の名のもとに確保しちゃうぞ』ちょっと、字余りかな？」

佐藤の手の中で、かすかな音を立てて、スチール缶が形を変えた。

「ねえ、由美。私、すごく真面目なんだけど」

「ごめん、ごめん。そうだ、写真とろうよ、美和子」

「写真？」

「制服着て、手帳持って写真撮るの。」

それをケータイの待ち受け画面に入れとくわけよ。

普通の写真だと、落したり忘れたりしやすいけど、ケータイならね。

で、手帳で信じてもらえない時は見せれば良いじゃない」

さ、善は急げ、すぐ写真とりましょうよ」

「でも、私今疲れた顔してるし・・・」

「大丈夫、友川さんは、似顔絵だけじゃなくって

メイクも得意だから、美人にしてみらえるわよ」

佐藤は少し考えた。

「いいかも」

「よし、じゃあ決定。友川さんのところへ行きましょ」

そっぴいながら、由美は内心ほくそえんだ。

“制服姿の美和子のケータイ待ち受け画面か。

絶対売れ行き良いわよ。

これで、ボーナスの目減り分は補填できるわね”

高木はデスクの前でため息をついた。

「迫力のある顔になりたいなあ」

独り言のつもりの言葉に背後から返事があつた。

「ほう、高木そうなのか」

振り向いた高木は、思わず、

椅子ごと後ずさりしようとしたが、机に阻まれた。

いつの間にか、強面の刑事達に取り囲まれている。

「今日、美和ちゃん、戻ってから元気が無いなあ」

もつとも迫力のある面構えの男が言った。

「あの、それ、僕のせいじゃあないんですけど」

高木の言葉をきいて刑事の目に凶悪な光が宿った。

「高木イ。美和ちゃんと仕事をするものにはなあ
美和ちゃんを、肉体的にも、精神的にも守るという、
神聖な義務が生じるんだよ。」

お前、其処の所、まだよくわかってないようだなあ。

さて、と、お前、迫力のある顔になりたいんだな。

じゃあ、取調室、行こうか」

男達は、じわじわと高木の方にやってきた。

その夜の目暮家

「あら、あなた、もうお食事お済みですか？」

みどりは驚きの声を上げた。

「ああ、ちよつとダイエツトしようと思ってな」

「まあ、どういう風の吹き回しですか？」

「いや、ちよつと人から太ってるっていわれてな」

「それ御婦人からですか？」

みどりの声が、かすかに硬くなった。

目暮は慌てて言った。

「御婦人つて、婆さんだよ」

「そう、私が体によくないからやせましようつて、何度言っても
聞く耳を持たなかったのに、その「婆さん」の言う事はきけるん
です。」

さぞ、お美しいのでしょうかね、その「婆さん」」

「おい、みどり。何言つとるんだね。」

今日の捜査の途中で、ちよつと話を聞いただけのほんとの婆さんだ
よ。

なんなら、佐藤君や高木に聞いてくれてもいいぞ」

みどりは冷たく言った。

「彼らはあなたにとって部下。」

上司をかばって適当な嘘をつくかもしれないわ。

被疑者と親密な関係にあるものの証言は、参考にしかない。

そうですね、あなた」

目暮は自分が容易ならざる立場に立っている事を知った。

「べ、弁護士を呼んでくれー!」

目暮の声は空しく響くのであった。

(おまけ)

そして、翌朝の本庁

携帯を覗き込む美和子は自然と顔がほころぶのを感じていた。

“さすが顔の専門家の友川さんが張り切って

メイクしてくれただけのことはあるわ。

でも、由美も結構写真撮るのうまい。

なんだか自分じゃないみたいに可愛く撮れてるわ、この写真”

「おはようございます」

元気の無い声に振り向いた佐藤は声をあげた。

「どうしたの、高木君、その顔」

「いや、先輩からちよつと」

「あら、どんな失敗をしたの?」

「いえ、まあたいした事じゃないんですよ」

力ない声で高木は答えた。

元気づけようと、声をかけようとした佐藤は、

部屋に入ってきた目暮を見て、言葉を失った。

佐藤の視線を高木も追って息をのむ。

目暮の挨拶に、平静を装って答えた二人は、ひそやかな声で会話を交わした。

「ねえ、目暮警部、昨日の事を気にされて
過激なダイエットに走ってるんじゃないの?」

「体によくないですよね、あんなにやつれて」

「そうだ、千葉君にも声かけて、昨日の事件解決のお祝いしまし
うよ。」

皆で美味しい物食べれば、昨日の事なんて忘れちゃうわ。

痩せた目暮警部なんて刑事らしくないもの」
その言葉に高木はうなずいた。

あくまでも、上司思いの部下達であった。

（おしまい）

（後書き）

微妙に変えている所がありますが

これも、某サイト様に置かせて頂いたものです。

刑事さんがいつも制服を警視庁に置いているかどうか、よく分からないですが、さらりとお流しくださいませ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5053b/>

刑事達の苦悩

2010年10月10日15時35分発行